

猿蓑四歌仙解

全下

中村俊定文庫

文庫 18

802

2





猿蓑四歌仙解

卷三



越後水原

鈴木荆山著

男野梅校

凡犯

灰汁桶の草やみり州を色くは

氣散れも冬の正身ハ弓射思進至小の忠此こと云ハ

すし一の物音もおれらふれは是知進しとすおれと

後白はきとりの虫はぬし易まうんた免子初心の

人志あす

阿中もろりて首寝まら秋

芭蕉

ゆらするとハあやうすし紙もてかたけをかねる

たるものなり

あつらひぬし十のさうはき

去来

何れをさす可ありて客も有らばあつらひぬし十のさうはき
無きもあつらひぬし十のさうはきの第一のさうはき
もとあつらひぬし十のさうはきの第二のさうはき
福もさす可ありて客も有らばあつらひぬし十のさうはき
客然をもとあつらひぬし十のさうはきの第三のさうはき
けさつらひぬし十のさうはきの第四のさうはき
也さつらひぬし十のさうはきの第五のさうはき

あつらひぬし十のさうはきの第六のさうはき

三二

懐くえれはかきりなき妙理を生ずあれ
さつらひぬし十のさうはきの第六のさうはき

子代徳屋を扱をさす可ありて子のりて

蕉

十のさうはき
あつらひぬし十のさうはきの第七のさうはき

客の考よ子ひり客降

肥

らつらひぬし十のさうはきの第八のさうはき
客の考よ子ひり客降
あつらひぬし十のさうはきの第九のさうはき

客の考よ子ひり客降

上りありてあなぐむやう—まゝにれいそ根子
そののりてあるとなり

ゆかり—にかますこ喰くハ風蒸

飛

夕ぬ—といひ風を流らるといふ夕ぬといふれ
むすこ味有りあまをこきまをやはらしよ
ある魚をえりしうひきこ葉子等の空を起す
よそよそし—空のやうなるかまをこのちりと
あり志うれハ多喜うそを越えたらありのと
えこたりかあまこ字鮮文字とさあく—みかき
名もあこあまのし—こまの塩の干物

の類々る也

煙は豆まかきて美味よき

蒸

是を煮家もこく人天奈雨年み成り
そ根子雨をかくこまあや—あつき餅
何ふり食ふとけん煙台をかゆく成りこま何り
おおといふふしを休むりよ ぬ
あれハ煙をかめり—人まき—白のこま
体むりのこまみよおおといふをまきし
ちり—

細うすきハ野あのを白おおといを忘れ

体部とハ轉側なる一柱れともあつたれハ
やみみそりれとらに面してぬやま
是梧桐棲老鳳皇枝江遠掃葉夕陽
僧のあんとんあ

むまひきりーとて殿よりけり

本

是前白子柱の景をかきて意味よきとあり
一付是女の姿なり忽ち男子より成りむ
世一き殿よりぬと又子趣向をまき
一と一き意れとて子會

金鏡と人子呼く身けやまき

蕉

てまふとく明くあに男の海跡あり一殊子武
本と定ぬり是と高村徳士の内子もす一け
まゝの志をくも出ぬともあつてねえ何の
後ハあまうと流る又つてまわれと殿白子
かゝぬみまをまゝと金鏡とて子會この
人あまうとぬり

のを任せ付かたうのこもあつたなみ
付ぬまのとりえに何もなき不慮をす
搦り来りて前白の影は長く後んで見れハ
二百のるま生ひを成程あまうと

熱風名好きの宵く月

飛

金鑑と嘆くくあの人多れは是れは氣多風と
さういふとて風名をも好むきいさしひを
アアと宵くく月と二つ重ねていひさるは
ひさしあふきいあふなり

評摩耶の言根より夕やの静煙に
おもしろいむいせうき金鑑はるまて
そなたは月さあくは静くあはれを人々
同じ人々を人つてさういふあはれを
人等々如何とすれは是もて女人同一人

三六

清き夕やに熱風名好きと外よりさよ
いと宵くく月と秋子て句作りあはれは
自他の差あはあふなり

町の秋と夏月明き夜一き

末

是ハ容易難解難評交ちて一明き夜に
風名又宵くく月とあはれは毎夜あはれを
あはれは人々を人々を人々を人々を
あはれは明き夜からいふと又ては是れ
清のえきさなう一宵乃る是風名とあはれは
そなたのなり熱風名好きの人宵くく月

ちうと同一かたし——まに品書といふをうりまあり
終の果いふ品書といふところなるべし

木曾の龍巻よま書しうれば

朧

龍巻二荷の根は系蘇れ系をともて梅漬しとら
干漆汁の内一生葉あり二荷の根を今葉者
の一様と名づひの書する書交あり一様と名づ
きとらとせんや後よみたるをともてたるべし
この何處念木書よ居らるると思ふなり本巻の
山端とてとらうらるれば地和念の身乃あり交
とおしとらし

三八

うら系やうらけ傳ふ四ヶ者

水

和念志を——本巻よあり系あり四ヶかしのまを
えく物にあり書しうればとらよありとらと
りよを系はしとらとらとら

系とら系のむねをうらま

水

山あり傳ひよ四ヶうら系系とら系系の梅漬
あり系を傳てえり人そ面おさハ自ら知りぬか
る——凡風物を書けり人この自然とをさあり
二ひ書系の龍巻を教とさし人や而念より
四ヶ向のうらとらとらよけおきとら妙書なるべし

あぢくそし

何おもひ尋狼のちく

水

は新すく狼のき吼きをすあさあしん燃念才
まは心すく交ようつたのまぬ狼のおまき
かしき怒うまて吼ととなり

夕月夜忌の昔狼の所願書

薫

是ハそれ狼の吼きを何世の交子ありてすけ子
と能れハ是れ昔狼の所願書りき居る夕月夜
まあまけらあり

人しとすまきし赤蜂ぬのぬ

犯

くまのまたらハまきたらとてまむるをさるる狐りつとら
かあ人のおととせんとすももと欠于耐ハ後の念
おとつとまを居るとと神授人をあし其のの教
子は赤そふのぬもありとすまきハせすしとてぬ
とまらに念をりぬとていふようくおり

う持はきよも懐いませし何そあえん ぬ

うを居くハ人のふをかまおるすいなひいよせと
あくさふよまきく居とらよい

又も大るの能きとらぬ

末

う持はきハ小人つり人かりそ免のたをむれぬ

も人のいやうなるはくちうりありあまるた
りみちをきたる能きとておしむらうおほふし
悦より田の喜やまきくいささあき

礼

こにたるの能きとておほく何まハ酒人六の一
者をえくたのむなりけりおほひくきの時
子法をいひてけりをとりえんてけりま
早後りたる悦のうらうも田の喜とまらた
くそいさまあまとなり

初心のくやうのまきくまきく一の字初
のあまの能き悦の生るるを知りぬし

加茂のやうとよき社なり

蕉

さて悦より田の喜やまきくいささあきといふは
何まの喜田をいふと悦は上と下とあか茂の
君の喜田をいふと悦はあきをいふと悦は
人の喜ひやうたるうらうまき田はおほく悦は
あきをいふと悦はあきをいふと悦はあきをいふと悦は
加茂のやうとよき社なりと悦はあきをいふと悦は
あきをいふと悦はあきをいふと悦はあきをいふと悦は

あうりの鹿野うらうと名をいふと悦は
おほひけり悦よりうらうと悦はあきをいふと悦は

東

衆を固めてあり 社衆衆を責む志まへハ介子村
七所一雨さぬい仕學あつてうる居たり鹿野大
あくと有れハ鯛やともやと海い身を居く是子
にハ我ひく夏るさま目子らんよト

雨のやとまこれそを迅連

魚

おに由のをとりのおハ風能乃能おは興
そたの喜界老少そ定とよとそ法そを迅連
そりけらるる

層候多き終りの身はた中とまよ

蕉

善居迅連の妻は甲今生と大切後生と大切

志あらくしお子蘭の替まてん

飛

層候多き終りの身はた中とまよ
はたの蘭家の生いたる志あらくしお子蘭
まて候り居る身あてた自適の風安却く
人まも安くてよりとそ法と意味され藤人の
替まてあり

系何たり後一をいよ吸よ多利

本

志あらくしお子蘭の替まてん
側なるい何たり候よまて候く枝も本す息と志
そのか

喜ハハ月あけ月のそ

あ

おろのや今ハソクあふ花の二首曙のそ
ちり

次ハ今ハ春のけしけし春白みふは格

猿蓑四歌仙解卷三

猿蓑四歌仙解卷四

越後 水原

鈴木荆山著
男野梅校

倭乙易東武行

乙易辛大伴子あり人子以翁も同居
志た重中とえくそり

梅よりぬかりこの若れとろけけ

芭蕉

あのとむれりもあゆむをねと屋すろかのあり
この若れとろけけしあろんやおうみまけ
祝しあつた

信玄あつてしき春の明け月夜

乙卯

是ハおのりもとなく春此そ達の心うれしく装ひ
粧き姿をありのまゝに白り比り装白と對せ
― 挨拶なる―

ひまわりちかく十田子お持こゝろちれや

玲歎

後白招きのひ緒―てすてあつてま立つ趣向を
其時節と定め暖玉ハ二月下旬お持ハ二月下旬
天つきと梅雪のあつ―にちりり残雪あつてり
そふれもひまわりハちや空まあつて知れり
さく啼たり柳あつて十田子お持も干かたをば

四一

其田のまゝ―も耕凡の田ををのりお持れハ
旅人よかゝるるあつて一白あつた子まゝあつて
若れすこといふや

志とすも秋あつて下されまゝり

まき男

志とすも文字姿志とすも又由ひまわりあつて尚ハ
お持りこゝろ農家のあつて肉の介ハ市子あつてか
七はたな他れお持れ米炊て餘あるは是姿
ちや―てお持り中お持りあつて

かゝるまゝ―むし置かてんてこれの月 丑

是ハおのりもとなくお持り中お持りあつてハ皆内子居合

きりなり又居ぬ者ありあや軽夕の人敷まで
よく志れ多を利一人たぬ旅よたらねくたて
きとて一箇のいさむといふく評揚子神に魚
秋あてい志月くやして春の家なりけれ月
いづもい月そをい何なるか

二階の春年たされら林

蕉

是ハ落葉四糸心の月輪中妙をたうく一虫
齒のいさむといづもくあほほとたれ命いづら
二階北客うたされくを利二階の客年をもとさう
旅の人たれハやまきあくるまはけ免れお利

四三

合意のすなれどもおれのり解さまれども
人子かゝるへきたよりおれくむ一箇といふをり
かぢりみるなり婦人の情こをりちりおの
うさ婦人といなれどもあはれえれハ婦人す
まきえまれり

おれちやあらうらのあといえくも世に 男

二階の客相名好まき通留のりらうくをた
さみに朝をきた家客うたきこれハいぬあ
ちりい巻の中よありて憂か人とををちや
くしころなり

稲の原は乃ちうらやまき風

頌

七解一なるうらやまのたぢまぢり情志はたけぬ
かゝる目録おろりて存てんまゝにせぬ稲の原もな
まゝのひ風とよはしくせぬまゝにぬまゝにぬ
志つらまけしきさなり

ほつと人の初は越おすころやま

甚

稲の原は乃ちうらやまき風
一とせぬは稲の原は乃ちうらやまき風
いとほしきあまをうらやまき風とせぬ
時あま一とせぬは稲の原は乃ちうらやまき風

四三

吾社のひびくを若家東尼西成の時ありて
可なり人の愛ひまゝたぬのひびくといふ事とあま
子屋をぬくまゝに信守の風はひびくまゝ
とらひてまゝにぬは乃ちうらやまき風の原
は乃ちうらやまき風の原は乃ちうらやまき風
付方なり

この愛ひまゝにぬは乃ちうらやまき風の原
越ゆるまゝにぬは乃ちうらやまき風の原
まゝにぬは乃ちうらやまき風の原

内花野うと時聲ハ誰

易

あつちの形事なり

己の刻柄始まりて申の刻よりなりて数次
あつち直倍軍虫よりあれいよくあ
時辰の事始まりて此の形とせし句
なり

萩のれ落乃れよみれ

品

此の事ぬかこまぬれの名より細ありと
字義を尋ねれいよくの事なりとて
よハ只老のよく村端にほなをたにたて、
あつちのこより外乃こなりすみ

萩の神なるよみ萩落といふ事ありあれいよ
守居のれ流おもいよせありとの心を付こ
不物なり

又およ静くありいづれは事なり
若くの地是に萩にれハ落神と
此の名を志せりれハ萩の事よりて
さあくの事ありつまひるあり
よすむいすく特表集の事
はく事法てられハかこの事ハ
生たよくも前句の事なり

こびく付らるものなほく重宝ありさくら
ありきおく草花の遠縁たつと娘
蒼くくふる百舌鳥の二羽り 智月

是ハ秋をまきに百舌鳥秋季の佳け物にし
但百舌鳥のこ息子すく免あこよふかといふ
あに一向まきくたふ顔向の自合なり
懐りよ秋あこもく秋の月 飛

百舌仲秋の只まきりて秋枝考く鳴く冷余
僅に時あふみ秋あこくむらなり
沙さこまぬおの酒つら 茹

漸く冬海は秋り急海志つあちくは
あぬき冬海の意あちんまに月よ沙
路志くくく

池の柄よまきまきりくは花のくれ 去来
沙さこまぬおの酒つらとあれハ何れを
海よむあち人のすうこるあちくは花の
くれ花の柄よまきまきりくは人あり

灰あまちくはかくは草の路 飛
花のそれいりあちまに花の柄よまきまきり
たこまきかくは草のこまきりか

茶事皆収志ありて、所をおさちて、七をく
ちりつりききとけの後乃けしきも利

其のりよ志ありて、所を經札

正書

經札中ありそちの檀箱の内は經札とあり
一檀箱とて、年俗は少也、經札とて、大風
流なる上、集なり、叔又三月のひきも、志は
おもおさち、いふまじ、年忌は、りなると、人さ
時をく

店をとのふ、休のふあり

本

是ハ古候檀箱の時、大勢のふ、未分を、つれあ

老のふ、なり、あれ、檀越より、うやまひ、馳走、は
ふ、ま、つり、あり、休のふ、う、つり、と、ハ、む、ひ、り、一、大
勢のふ、あり、ハ、部、名、く、そ、ま、一、お、つり、の時、を、休、み
番、なり、お、つり、の時、ハ、お、つり、のもの、書、き、く、口、の
ふ、れ、お、つり、ぬ、ま、も、つ、と、も、ま、と、な、り、店、合、も、の、ふ
ふ、あり、ハ、む、ひ、り、り、一、もの、とも、なり

汗ぬらひけし、の志あり、の、併、乃、は、と

正書

膝のふ、あり、ぬ、ま、も、つ、と、も、ま、と、な、り、の、志、あり、は
い、ま、ま、の、あり、希、志、あり、ふ、と、あり、く、その、志、あり、も
あり、く、一、つ、ま、の、汗、ぬ、ら、ひ、は、け、し、併、の、系、は、付、て

意をまゝとすゝさ法及す家なり

小刀の蛤も細工箱

疎

一年中やまをたふせまてゝゝまてゝ妻子も
まのまゝこれしたちのおせ免ぐ及々をまて
もとむ家ちのゝまゝ一丁の少刀おゝ蛤り母
ちれもも司くをまてゝなり

桐

園風

おの使けを免れ、何をまてゝなまをいふと今
宵もまゝなり来るゝも明る年とまの暮
まかすけゝらちまをのゝまてゝとむとらなり

四九

こゝちやまをたふせも須磨の浦 様維

昔ハ藤人の磨のあつれを吟せ人とまゝけ地ま
ありまゝあゝと極いさゝと終り六年の夜
まてぬ須磨のうちはありまゝなりまゝまゝ今
まゝとんとおのあゝと回答するまゝとんと
まゝとんとあゝとあれハ馬駕の使りも不
自中の地まゝもあゝとあゝと使りもいんまゝの
まゝとんとあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと
たゝとんとあゝとあゝと

あゝとんとあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

のそみそ他まあつら古今の書を見たとふ
子あつて人いすくく知りまひひくく
大國おき極み人むへなるる風

むねらちあつてあつて肩衣

跡

頭子まはけくま白なれは次すちりてすまは
かきとなりんまを白まおあられの地この
念佛講まきしあやむねお合意する肩衣
備人の風俗よく形家せと子一

はなしかま免をくま破れ扇

風

むららちあつて有衣あつておやちもあつて

のむく風いくひきき破扇れ要を法なきて
用ひ居くまなり

物部神子せき志はし月え

雜

かの破扇いり丹とんれま子持をう物部神を
法くまむ体えくぬるり月のぬなれは蜂
源くくおもくわひ老の徒然をちくさみ居
ちるなり

嘆聲りの隣りハちのき椽法し

芳

そまむく又さかたらなりけそくと嘆の言する
八月のあるまておるゆつく家をえく居るるあふ

お茶をあらうしそふちをまうえくわさるま
暖ぢうのといふく目の白を他の白ははかり
うさふちを

活くハそふちとてく免んぬ歌

風

極つてのま味もあつて交り新しむなり
つきあいらさぬる母とてあんなはま和の人なり
活くハそふちとて別志とてあハ志とてむ母と
のま味なり

形もきく孫をおわく家會津屋

嵐蘭

てく免んを人會津屋の孫をうさたるもの

又くめんの人形もきく孫も習つといふ
いやといふねは後の趣向のなり

落書かゝる休のころり下法

史邦

是と茶人の庭先きとる合たよあつて細うま
白き味もきく花の白と其甚異なり

花うまといふのつれもささる

野水

落書かゝるつれもささる
年のつれもささるねは時候のささるねなり

雛のたもとを降る若あ少

お紅

こころのつれもささるねは時候のささるねなり

能ハ江生優長のいふもとを深々吾風なく
もふらんこれ持の袂子解れりさす風
能ふ子ら名家の何れもそし春白の格
なる

猿蓑四歌仙解卷四

